

レヴィナス 『存在するとは別の仕方』における

「呼吸」—〈他者〉との対面に向けて

“Respiration” in Levinas’s “Otherwise than Being”

- Toward facing “the Other”

川崎 陸央 (株式会社チェンジ)

【要旨】

本稿では、〈他者〉との対面の事況のより具体的な理解に向けて、レヴィナス 『存在するとは別の仕方』における「呼吸」のあり方の解明を試みる。

「呼吸」とは〈他者〉に向けて自己を放棄する身体の動作であり、生物学的な意味での呼吸とは区別されるような、「他なるものによって息を吹き込まれる」呼吸である。〈他者〉との対面は、この人間の「呼吸」における〈他者〉との舞踏のリズムにおいてあり、またその「呼吸」は「存在すること」の終わりなき運動の中に位置づけられる。

In this article, I attempt to elucidate the nature of “breathing” in Levinas's “Otherwise than Being” in order to understand more concretely the situation of the encounter with “the Other”.

“Breathing” is a bodily move of relinquishing the self to “the Other”, a breath that is “breathed in by the other”, as distinguished from breathing in the biological sense. The face to face with “the Other” is in the rhythm of the dance with “the Other” in this human “Breath”, And that “Breath” can be positioned within the endless movement of “Being”.

【キーワード】

〈他者〉、〈語ること〉、感受性、〈無限者〉=〈神〉、「呼吸」、〈ある〉、「獣性」と「人間」の違い、「他のものによって息を吹き込まれる」、舞踏のリズム、「存在すること」

“The Other”, “The Saying”, Sensitivity, “The Infinite” = “The God”, “Respiration”, “There is”, The difference between “animality” and “humanity”, “Breathed in by the other”, The rhythm of dance, “essence”

1 本稿のテーマ、背景、構成

本稿では、〈他者〉との対面の事況へのより具体的な理解を可能にするために、レヴィナス『存在するとは別の仕方』⁽¹⁾における「呼吸」のあり方の解明を試みる。

20世紀以降、特に哲学や倫理学において、旧来の〈私〉を中心とした世界観では捉えられない〈他者〉についての思索が広く展開されるようになった。

この〈他者〉思想の古典としてしばしば参照されるのが、フランスの思想家レヴィナスである。彼が唱える絶対的外部としての〈他者〉(l'Autre)⁽²⁾思想は、狭義の哲学・倫理学を越えて、政治学や社会学、教育や芸術、医療や福祉の現場にも広く援用されている⁽³⁾。

P4Cの領域においても、レヴィナスを参照した研究は多い。例えば教育哲学者のガート・ビースタはレヴィナスの思想を背景としながら、「教え」とは自己の外部たる〈他者〉から呼びかけられ、その〈他者〉への代替不可能な応答責任(responsibility)を背負うことで、固有な「主体」が現れ出る出来事であると論じている。彼は、自己のあり方が「中断」され問い直されるこのような経験に、教育としての対話の価値を見出している⁽⁴⁾。

その他にも、教師と生徒が互いに〈他者〉として「教え」る関係を説いたジョルダスマやオリヴェリオ⁽⁵⁾など、レヴィナスの〈他者〉との対面を踏まえたP4C理論を展開している研究者は多くいる。しかし現状ではいずれの研究も、〈他者〉との対面の重要性の指摘に留まっており、〈他者〉と対面するとき具体的に教育者/ファシリテーターがどう振る舞うことになるかまで考察を進められていない。ビースタたちが論じる新たなP4Cを実装するためには、〈他者〉との対面が具体的にはどんな出来事であり、その場で私たちはどんな振る舞いをするようになるのかを明らかにする必要がある。そこで本稿では、〈他者〉との対面における振る舞いについて考えるために、レヴィナス自身がなした考察に立ち返る。彼が『存在するとは別の仕方』において、「呼吸」という極めて日常的・身体的な動作を手がかりとして考察した「われここに」たる主体のあり方を解明し、〈他者〉との対面の事況へのより具体的な理解への足がかりを構築することを目指す⁽⁶⁾。

なぜ『存在するとは別の仕方』の「呼吸」に着目するのか。それは、レヴィナスの論じる「呼吸」こそ、〈他者〉と対面する主体の、絶対的に受動的な動作だからである。『存在するとは別の仕方』の中でレヴィナスは、主体とは既にして他者の「身代わり」であり、絶対的な受動性へと開かれていると指摘している。そして第6章「外へ」において、人間の呼吸においてその受動性が現れていると論じられている。この「呼吸」について解釈することは、〈他者〉との対面の考察を深めて具体化する上で非常に大きな意味を持つだろう。

このような背景を踏まえ、本稿では以下のような流れで議論を進める。まず第2節で、『存在するとは別の仕方』における「絶対的な受動性」「身代わり」の状態について整理する。第2節での整理を踏まえ、続く第3節では、人間の「呼吸」がいかなるものであるか考察する。最後の第4節では、「呼吸」のあり方を「舞踏」および「存在すること」の終わりなき運動として解釈・整理しつつ、今後の研究に向けた展望を開く。

2 『存在するとは別の仕方』における「絶対的な受動性」「身代わり」

『存在するとは別の仕方』冒頭においてレヴィナスは「存在とは他なるものへと過ぎ越すこと passer à l'autre de l'être」(AE 13)を自らの探究の目標として宣言し、従来の哲学—

特にハイデガーやフッサールの現象学一が、「存在の彼方」にある〈語ること〉ではなく「存在」の範疇にある〈語られたこと〉のみを捉えていたと指摘している(7)。

「存在論的差異」(8)や「過去把持/未来予持」(9)する存在をめぐるこれらの考察の段階において、〈語ること〉(le Dire)は〈語られたこと〉(le Dit)の中で融解されている。言い換えれば、〈語られた〉「何」=内容の前提となる(あるいはそれを超出する)、〈語る〉「誰」=〈他者〉が隠蔽されてしまっている。しかし、「存在とは他なるものへ過ぎ越すこと」を目指す限りにおいては、「〈語られたこと〉の彼方ないし手前 au-delà ou en deçà du Dit」(AE 74)にまで遡らなければならない。

こうした遡行は「還元」(la réduction)によって行われる。ここでいう「還元」とは、存在論的範疇におけるこのような「何」と「誰」の区別の抹消を「還元」し、その根源的区別を「還元」する営みである。

〈語られたこと〉の彼方ないし手前。それは「何」に還元されない「誰」の刻印であり、「どんな〈語られたこと〉にも先立つ〈語ること〉 Dire d'avant tout Dit」(AE 75)としての他者に対する責任である。他者に対する責任という〈語ること〉は、存在の範疇に留まることがない。〈語ること〉は存在することの中断であり、内存在性の我執からの超脱である。そうした点において〈語ること〉は、存在論的範疇に先立つ倫理—「倫理的差異」の顕現(10)—である。

フッサール流の現象学的還元から区別されるこの「還元」によって見出される〈語ること〉は他者に対する絶対的責任であるが、それは「〈他人〉への曝露という至上の受動性 (la suprême passivité de l'exposition à l'Autrui) として導入される」(AE 81)。〈語ること〉という〈他人〉への曝露によって、通常の意味での志向性は「逆転」する。それによって、「能動的かつ至高の主体性は自己放棄する」(AE 81)。「能動的かつ至高の主体性」においては、〈他者〉という根源的「誰」は、志向対象としての「何」として—存在論的範疇の中で—捉えられてしまう。このような志向性からの「逆転」、言い換えれば主体性の自己放棄によってのみ、存在とは別の仕方では〈語ること〉という〈他人への曝露〉がなされるのである。

ところで、このような主体の自己放棄、絶対的受動性は、思弁的なものではない。〈語ること〉は、「苦痛の可能性たる生ける人間の身体性によって生じる」(AE 86)。ここで述べられている「苦痛」は極めて法外なものである。それは、自己を犠牲にして他者に供するような剥奪よりも更に苛烈な、そうした剥奪の可能性すら剥奪するような「犠牲に供される実存」(AE 86)であり、「自らの皮膚さえ自己の所有物として有することなく、自らの皮膚のうちに痛みを抱えること」(AE 86-87)としての「可傷性」(vulnérabilité)なのである。

しかしながら、この「苦痛」は「物同士が衝突するときのような因果連鎖における機械的な受動態」(11)とは異なる。そのような苦痛は生物学的な反応に過ぎず、ここで述べられているような、絶対的「隔時性」(la diachronie)の中で切迫してくるような苦痛とは異なる。

では、いかなる点において、苦痛は切迫となるのか。それは、逆説的ではあるが、「幸福感ならびに享受として体験された感受性のうちで萌芽する」(AE 93)。上記のような生物学的反応としての苦痛は、「受け手が不在の匿名的な出来事に過ぎない。傷を被ることが『ほ

かならぬ私』に生じたこととして意味を持ちうるのは、感受性が私に属するものとして単独化されていればこそである。そして、この感受性の単独化を可能にするのが、私を<同>として構成する自我中心的な営みとしての享受なのである」(平石 60)。

<同>を構成する自我中心的な営みとしての享受は、レヴィナスの第一の主著『全体性と無限』第二部において既に提示されている。ここでいう「享受」(la jouissance)は、別の目的の成就を目指すものではなく、その行為自体が目的となるような行為である。私たちは「美味しいスープ」⁽¹²⁾を飲むが、それは生存に必要な栄養を取るためであるだけでなく、スープを飲むという行為自体が「享受」の対象であり「嗜好」(la goût) (TI 113)に差し出されている。さらに言えば、道具を用いることが他なるものへの依存を示しているのに対して、享受は自分自身において完結する行為である。それゆえに、享受は最も原初的な<同>(le Même)を構成するのである。

享受によって、感受性は他ならぬ<私>(le Moi)の感性として引き受けられる。それゆえに苦痛、可傷性もまた、避けることができない切迫として現れることになる。この両義性において、存在の彼方が、そして<語ること>の可能性が開かれるのである。

ここまで、<語られたこと>と相関しない<語ること>について、<私>の<他者>への曝露ないし身代わりという二者関係から説明してきた。しかし、聖域のように見えるこの二者関係は、決して二者に閉じた関係ではない。というのも、そこには<無限者>(l'Infini)一別の言葉では<神>(le Dieu)と呼ばれるもの—が闖入するからである。

<語ること>は「われここに」(Me voici)という、主格ならざる対格のあり方として表現される。この「自己同一性の破裂において、逆説的に、誰も私の代わりに身代わりになることができないという私の『唯一性』(unicité)が生まれる」⁽¹³⁾。

唯一なる者としての「われ」の意味は、まさに<他者>の身代わりとなることにおいて与えられる。そして、<他者>から与えられる「意味」が「意味」たるのは、<われ>と<他者>との間に、絶対的に乗り越えられない隔たり(「隔時性」)があるからである。この隔たりは<無限>であって、その<無限>が<神>の本質となり、「われ」としての固有な場が示され、「われ」に固有な意味が<神>から授受されるのである⁽¹⁴⁾。

3 「他のものによって息を吹き込まれること」—「人間」の呼吸

本節では、「呼吸」というキーワードを手がかりに、前節で述べたような絶対的受動性にして身代わりたる「われここに」の身体性をより具体的に解明する。前節における感受性の考察が「静」の身体性—「状態」—の記述だったとすれば、本節で展開するのは「動」の身体性—「動作」⁽¹⁵⁾—の記述である。「呼吸」という最も根源的で最も繊細な身体の動作から「われここに」を語り直すことで、身代わりとしての主体のあり方—<他者>との対面の事況—についてより具体的に理解することを目指す。

「呼吸」とはどのような動作であるか。レヴィナスは以下のように説明している。「他人への自己の開け、それは何らかの始原によって自己を条件づけ、自己を基礎付けること。それは呼吸であり、呼吸とは幽閉からの解放としての超越である」(AE 278)。

『全体性と無限』の中で示されていた通り、空気は表象の対象である以前に享受の対象である(TI 112)。それは生の糧(nourriture)となり、自存する<同>の礎となる。しかし同時に、呼吸することは可傷性へ開かれることでもある。そうであるがゆえに、呼吸とは

「他者から吹き込まれる息」⁽¹⁶⁾であり、その他者からの息を吸って、自らの息として吐くことである。まさに「身代わり」の構造、あるいは「自らが定位する『場所』を失って空間そのものへ開かれる運動」⁽¹⁷⁾が、呼吸の中に宿っているのである。

吸った息がそのまま吐く息になるような呼吸は、獣のような荒い呼吸をイメージさせる。しかしここで言う「呼吸」は、そうした「獣性」(animalité)ではないとレヴィナスは言う(AE 278)。「人間の呼吸」とは、「日々の規則正しさのうちに、<存在すること>を凍えさせる吸気の息切れを聞く」(AE 278)という点で、「獣性」の呼吸から区別されるのである。

以上、『存在するとは別の仕方』第6章「外へ」の記述を元に、「呼吸」について概観した。とはいえここまでの説明では、「呼吸」の動作について明確なイメージを持ちにくい。そこで以下では、ここまでの内容を踏まえ、次の3つの問い—「呼吸」は他の類似の動作とはいかに異なり、それゆえにどんな動作なのか—について論じ、絶対的な受動性の動作としての「呼吸」についてより具体的で精密な解釈を試みる⁽¹⁸⁾。

1. 「呼吸」は<ある>(il y a)への融即なのか？
2. 「呼吸」は獣性の呼吸と何が違うのか？
3. 「他のものによって息を吹き込まれる」とはどのような呼吸か？

3-1. 「呼吸」は<ある>(il y a)への融即なのか？

藤岡が指摘する通り(藤岡 235)、呼吸が自らの場所を放棄して「非-場所」(non-lieu)へ曝される経験なのだとする、その経験は<ある>(il y a)への融即(participation)ではないのか、という問題が浮かび上がる。

<ある>とは、「あらゆる存在が、事物も人もことごとく無に帰した」⁽¹⁹⁾ときに現れる「本質的な匿名性」(EE 95)である。全ての事物や人が消滅するとき、そこには無ではなく、一切の固有名を喪失した<ある>という存在の事実だけが残る。

確かに、吸気が呼気に転じるような「呼吸」においては、存在の固有性が失われ、「夜une nuit」(TI 151)に一切の事物や人が霧消してしまう可能性があるように思われる。しかし「呼吸」とは「われここに」の動作であり、<他者>への身代わりという形で逆説的に「われ」に固有な意味が創設される経験である。「呼吸」は、「われ」の固有性を喪失させる<ある>への融即からは区別されなければならない。

とはいえ、「呼吸」することと<ある>への融即は、簡単に区別できるわけではない。リクールは、<語る<こと>においてそれでもなお拭い去れない、<ある>における「無意味の発生可能性」⁽²⁰⁾を危惧している。「われここに」において、「われ」が<他者>あるいは<無限者>=<神>へ曝されるとき、「われ」に固有な意味が与えられると確信することはできない。「われここに」は徹底して受動的でしかない様態であり、いかなる期待も許されず、無限なる隔たりを前にしてただ忍耐するしかないものである。その忍耐とは、まさに<ある>しかないことの不安に対する忍耐であり、「もしも意味がないのであったとしたら」(Ricoeur 38)という危惧を抱え続けることへの忍耐である。

3-2. 「呼吸」は「獣性」の呼吸と何が違うのか？

<ある>—匿名の存在一般—への融即と同じように、「獣性」の呼吸もまた、「人間」の呼吸から区別して想定されている(「獣性」と言っても、具体的な「(非人間の)動物」を

指し示しているわけではない)。「人間」の呼吸は、「獣性」のそれと違って「日々の規則正しさのうちに、＜存在すること＞を凍えさせる吸気の息切れを聞く」(AE 278) ものである。「獣性」の呼吸が「存在の存在すること」における「時間の時間化」(過去把持や未来予持)だとすれば、「人間」の呼吸は「存在すること」を中断させる「隔時性」である。

では、どのような点で「獣性」の呼吸は存在の次元に留まるのか。なぜ、「獣性が存在することの彼方への開け」であるためには「獣性はあまりにも短い魂の息 (le souffle encore trop court de l'âme) たることをやめなければならない」(AE 278) のか。

この引用部と対比させる形で、レヴィナスは「人間」の呼吸について以下のように叙述している。「人間とは中断することなく息を吸い込み、一方的に息を吐き出す、最も息の長い (le souffle le plus long) 動物ではなかろうか」(AE 278-279)。「獣性」の息の短さと「人間」の息の長さが、ここでは対照されている。「人間」は「中断することなく息を吸い込むが、「獣性」の呼吸はそうではない。

「呼吸」という言葉からイメージしやすいのは、むしろ「獣性」の呼吸の方だろう。日常的な感覚に沿って言えば、私たちは息を吸って、一瞬中断して、息を吐く。この繰り返しにおいては確かに、「獣性」の呼吸においても「吸気が呼気に転じる」(AE 278) ような他者への開け (ouverture) がある。けれども、この「獣性」の呼吸はあくまで享受の次元の呼吸であり、「わが家から脱出し、ついには自己からも脱出する」(AE 279) ような呼吸ではない。「獣性」の呼吸が生物学的な言語で語られるものである限り、その呼吸は「～によって生きること」(vivre de ~) という享受に留まる。

「獣性」と「人間」の呼吸の差異について考えるには、「人間」の呼吸の「息の長さ」に注目しなければならない。生物学的な言語で呼吸を考える限り、「中断することなく」息を吸うことはできない。一度に吸い込める空気の量には限界がある。従って、生物学的な言語とは「別の仕方」で呼吸について考える必要がある。具体的には、享受の「糧」にならないような空気、「他のものによって息を吹き込まれる une inspiration par l'autre」(AE 278) ような呼吸の可能性を考察する必要がある。

3-3. 「他のものによって息を吹き込まれる」とはどのような呼吸か？

「他のものによって息を吹き込まれる」呼吸は、そのプロセスからして「獣性」の呼吸とは異なっている。「人間」の呼吸は、「吸い込まれた」息を「吐く」のではなく、「吐く」息の中において「息の吸い込み」が証し出され、しかもそこで証された「息の吸い込み」は、吐息に対して時間的に先行しない「無-起源 an-archie」だからである。

人間の「呼吸」は＜他者＞に対する「身代わり」であり自己供与だが、この「身代わり」は、王に忠誠を誓う騎士の所作と同一視されてはならない。「身代わり」になることは、決して引き受けられないことなのである。仮に引き受け可能だとすれば、それは「受動性」を引き受ける「能動性」に還元されてしまい、＜語ること＞は、主体の支配下における＜語られたこと＞に反転してしまうからである。＜語ること＞とは、一切の引き受け—弁明、口実など—をも拒絶する「真摯さ」(sincérité) であり、「＜語られたこと＞について何も語らずに自己を供与する＜語ること＞」(AE 223) である。

＜他者＞と「われ」との間の＜無限者＞、「隔時性」は、この「真摯さ」の中で初めて証し出される。＜無限者＞は、＜無限＞の観念ではなく＜無限＞そのものであるがゆえに、

一切の起源を持たない。したがって、「われここに」が〈無限者〉に対する自己供与であるとしても、それは既に存在する〈無限者〉への差し出しではない。もしそうであるとすれば、〈無限者〉は供与の「対象」となり、その点で〈語られたもの〉の範疇へと墮とされてしまうだろう。「至高性」を「われ」が目指すのではなく、「居心地の悪さ」(AE 228)という対格としての「われここに」のうちで、〈無限者〉の次元が開かれる。「栄光 (la gloire) は他ならぬ私の口を通じて命令する」(AE 230) のである。呼吸の言語でこの事態を言い直せば、まさに呼気において吸気が証し出され、しかもその吸気は呼気に対して時間的に先行しないのに、呼気を条件づける、ということになる。

けれども、こうした聖潔なる真摯さの態度は、卑俗なく語られたことと宿命的に結びついている。〈他者〉の身代わりとなることによって、「われ」は自らに固有な意味を獲得する。だが、「意味が現出するためには主題化は不可避なのだ」(AE 237)。存在するとは別の仕方でも過ぎ越すとしても、その〈無限〉なる〈神〉は「われ」の口を介して〈語られる〉ほかない。真なる「真摯さ」とは、拭い去れないこの裏切り、〈語られたこと〉による〈語ること〉の隠蔽を、絶えず撤回し続けることである。「超越は、自分自身についてなされる論証を中断しなければならない。超越のメッセージが聴取されるや否や、超越の声は沈黙せざるを得ない」(AE 237)。

こうした点において、超越は「意味の明滅 *clignotement de sens*」(AE 238)を必要とする。〈無限〉なる〈神〉の超越は、その意味の顕現と同時に意味を抹消するようなものとしてのみ現出するのである。「人間」の呼吸もまた、この「意味の明滅」の中で位置付けられなければならない。「人間」の呼吸は、まさにこの〈無限者〉としての〈神〉に向けられた「われここに」の態度だからである。

「意味の明滅」の中で「超越の声」を聴くこと—「人間」の呼吸における「息の吹き込み」—。この動作について精察するために、以下ではレヴィナス研究者のフランソワ＝ダヴィッド・セバーによる「舞踏のリズム」—「意味の明滅」のリズム—について論じる。

4 結論と展望—「存在すること」における「舞踏」としての呼吸

〈無限〉として現れる意味が、現れると同時に沈黙してしまうような「意味の明滅」は、どのような運動と共に生じるのか。この問いに対してセバーは、「度外れ」の中に「節度」を持つ「舞踏のリズム」において意味の明滅が生じると指摘している。

前項 (3-3.) で論じた通り、〈語ること〉は「われ」の口を通じて、〈語られたこと〉においてのみ告げられる。〈語られたこと〉のうちで抹消された痕跡として、その栄光が証し出される。〈語ること〉は徹底した度外れであるが、むしろ常に度外れであるために、〈語られたこと〉との隔たりの測定を必要とする。言い方を変えれば、〈語ること〉の度外れ—絶対的的他性—は常に〈語られたこと〉へと送り返され、回帰された〈語られたこと〉のうちで〈語ること〉の言葉が可能になるのである。

〈語ること〉と〈語られたこと〉が互いに互いを触発し往復する運動について、セバーはレヴィナスの「現実とその影」というテキストを踏まえ、「リズム」という観点からの考察を試みている。

「現実とその影」において芸術作品におけるリズムは、芸術作品ないしその中のリズムが非現実的なものであるが故に、「実体を解体するものとして、脱—存 (Ek-stase)」⁽²¹⁾とし

て解されている。それゆえレヴィナスは、リズムへの抵抗を呼びかけている。

他方で『実存から実存者へ』においてリズムは、実体を解体させるものとしてではなく、「<同>への溶解」(Sebbah 262)として批判されてもいる。リズムの中にあることは、現実から非現実への脱存であるのと同時に、<同>による享受の運動でもある。<同>の享受においてリズムは、「暴力的な核摘出ではもはやなく、単調な繰り返し、つまり警戒の喪失としての反復、甘美で緩慢な溶解」(Sebbah 262-263)となるのである。

しかしながら、リズムについてのレヴィナスの正反対な語りは、彼の考察の不完全さを証明するものではない。むしろこの明らかな対立こそがリズムの本質をなす。つまり、「リズムは、[中略] 生きた肉親の親密性のうちで絶対的に現前しているのと同時に、断絶や起源的な亀裂の計算不能性の中で常に既に根本的にリズム自身に対して欠如していてもいるのだが、それは不安定化の力能である」(Sebbah 265)。リズムの中において私たちは、「存在するとは別の仕方では」を見て取ることができる。<語られたもの>の中で、自分自身に対する裏切りの中でのみ自らを示すという、この逆転的な仕方を。

リズムにおいては、他性から自同性への変調と、自同性から他性への変調が、互いに互いを呼び出しあう。リズムという他性への拉致は単に暴力的なものではなく、その拉致そのものが<同>の享受となり、自同性の運動へと引き戻される。他方で、リズムは単なる「凝固した拍節の反復」(Sebbah 268)ではなく、絶えず過剰を再生するものであるがゆえに、「われ」を<同>に閉じ込めることなく、その過剰へと連れ去っていく。

<神>に向けられた「われここに」の呼吸は、まさにこのような明滅のリズムにおいて位置付けられなければならない。別な仕方では、「舞踏」として、<他者>に対面して<無限者>と共にある「呼吸」として、位置付けなければならないのである。

セバーは、レヴィナスの論じる「リズム」を「舞踏」と読み替えているが、この読み替えには正当な根拠が与えられる。リズムは<他者>と共にある一他性への拉致と自同性への還元の往還の一リズムであり、その点で舞踏的だからである。

この舞踏性が、「人間」の呼吸を「獣性」から隔てる決定的なポイント—生物学的な言語では説明できない呼吸の特性—となる。「獣性」の呼吸は、常にその個体・個人の水準で記述されるが、「人間」の呼吸は<他者>と共にある。つまり、「人間」の呼吸とは、<他者>との舞踏のリズムの只中にあり続けることである。では、それはどのような呼吸であると言えるのか。本稿の残された紙面でこの問いに対して明確な解答を与えることはできないが、今後の研究の展望を開くために、この問いをできるだけ身体の具体的位相において考えるための一アプローチを最後に提示したい。そのアプローチとは、「呼吸」を<私>が「存在すること」の終わりなき運動の中に位置づけて捉えるというものである。

<私>が存在するとは、<私>がその存在を所有することであるが、存在することへの絶えざる欲動に突き動かされている<私>は、その存在を絶えず引き受けようとする中で、どうしても引き受けられないような「重さ」を経験する⁽²²⁾。ここに「存在すること」の挫折があり、所有されざる他性への開かれがある。この事態を「呼吸」の文脈で換言すれば、周囲を取り込んで自らの糧にする「享受」としての呼吸が反転し、糧にできないような他なるものに開かれる「傷つきやすさ」としての呼吸となる、と言えるだろう。

「存在すること」の挫折を経験した<私>は、その重さが法外なものであり、単に自分の力量不足故に背負いきれないのではなく、本質的に所有を拒むもの—無限なるものであ

ることを理解する/理解させられる。けれども、この無限性の啓示は、無限であるはずの他性を<私>の意味理解の世界へと還元してしまう運動である。だからこそ、この無限性は、その意味の到来と意味の解体を同時に孕んでいる。無限性は絶対的他性であるがゆえに、ある特定の意味作用には絶対に還元されない。<私>の目の前に無限なるものが無限なるものとして現れたとしても、その現れはまさにその瞬間に解体され、再び無意味へと転落するのである。このようにして、<私>の意味理解の世界へと還元されるかに見えた他性は、再びその彼方へと開かれていく。

以上のように、「呼吸」における<他者>との舞踏のリズムは、<私>の「存在すること」の運動—単に存在するだけでなく、存在することを欲望するあまりにそれを超えてしまうような運動—とリンクしており、この運動の中に位置付け可能であると想定できる。

では、このような仮説は「呼吸」の本質とどのように関わっているのか（単なるこじつけではないのか）。そしてこのように仮説を立てることによって、今後の P4C 理論実践にどのような効果があると想定できるのか。この 2 点について簡潔に論じて、本稿を閉じることにする。

「呼吸」とは他性を同化すると同時に他性によって傷つけられる可能性に開かれることだが、ここでいう他性は単なる外部的存在者ではなく、「同の中の他」(l'Autre dans le Même) である。「呼吸」が<他者>との舞踏のリズムにおいてあるからと言って、その<他者>を外部に措定してはならない。むしろここでは、<私>がいかにして存在しているかという、<同>のあり方をこそ注視しなければならないのである。

P4C の現場において<他者>との対面が具体的にはどんな状況であるか、その中で私たちはどのように振る舞うのかを考える上では、<他>から<同>へのこの視点の転換こそが非常に大切になる。<他者>に目を向け、いかにして<他者>と向かい合うかという探究は、しばしば「これまで看過してきた他者の他者性を尊重しよう」というような、一般的な規範道徳の提示に帰着してしまうが、レヴィナスが『存在するとは別の仕方』で述べたいのはそうした話ではない。<他者>との対面は、日常的な意味での対面ではなく、むしろ<私>の存在の終わりなき運動の中で生起する出来事に他ならない。したがって、レヴィナスに基づいて<他者>を考える時、目を向けるべきは眼前の他者ではなく、他者と共にある<私>自身の存在なのである。<私>自身の存在の仕方に目を向けることによって、<他者>との対面への問いは観念論的・抽象的な道徳規範の問いではなく、具体的に身体的な問いとなることができるだろう。

本稿では、舞踏のリズムの中にある「呼吸」のあり方についてテキスト上での解釈・仮説を提示したに過ぎない。最後に提示した「存在すること」についても、<私>の存在の運動の中で「呼吸」を捉えることで、その呼吸のより具体的位相が見えてくるのではないかという仮説の提示に留まっている。P4C の現場でいかに<他者>との対面が生起し、その中で私たちがどのように「呼吸」するのかという問いについて考えるには、本稿で整理した「呼吸」のあり方を「存在すること」の具体的な場面および身体の相に置き直し、この仮説を検証する必要がある。これを今後の研究課題として宣言し、以上をもって本稿を閉じる。

【註】

- (1) Levinas, E. (2014) *Autrement Qu'être Ou Au-Delà de l'essence*, Le Livre de Poche (合田正人訳(1999)『存在の彼方へ』、講談社)。以下、本文献引用時は (AE (ページ数)) の形で示す。なお本書は日本語では『存在するとは別の仕方』または『存在の彼方へ』と略記されることが多いが、英語では基本的に “Otherwise than Being” と表記されていることを踏まえ、本稿では『存在するとは別の仕方』の略号を採用する。
- (2) 本稿では、レヴィナス研究者の小手川正二郎の解釈に則り、「他なるもの」に関する類語を以下のように訳し分ける (小手川正二郎(2015)『甦るレヴィナス—『全体性と無限』読解』、水声社、64頁)。
- Autre : <他者> (「同」に対する「他」、自我とは根底的に異なる他性)
 - Autrui : <他人> (<他者>として現れる他人)
 - autre : 他のもの (自我と異なる様々なもの)
- (3) レヴィナス協会編(2022)『レヴィナス読本』、法政大学出版局、第IV部参照。
- (4) Biesta, G. (2017) *Rediscovery of Teaching*, Routledge, 93.
- (5) Joldersma, C. W. (2001) “Pedagogy of the other: A Levinasian approach to the teacher-student relationship”, *Philosophy of Education Archive*, 181-188. Oliverio, S. (2017) “The teacher as liberator: Ann Margaret Sharp between philosophy of education and teacher education”, Gregory, M, R., Laverty, M, J. (eds.) *In Community of Inquiry with Ann Margaret Sharp*, Routledge, 63-75.
- (6) 本稿の目的を踏まえると、レヴィナスの研究ではなく、彼の思想を具体的な状況や動作に落とし込んだ研究を参照すべきではないかという反論もあるだろう。しかしレヴィナス自身が論じる <他者>との対面のあり方を精察しない状態でそうした応用研究を参照すると、考察が表層的なものに留まる恐れがある。そこで本稿ではまずレヴィナス自身の研究に立ち返ることとする。また、本稿の考察だけで、<他者>との対面の事況がクリアに理解されるわけではない。本稿はくまでレヴィナスの「呼吸」論の考察であり、<他者>との対面の具体的理解のための足掛かりという位置づけになることをご了承いただきたい。
- (7) レヴィナスによるハイデガー・フッサール批判の解釈は、以下著作の第1-2章に詳しい。Franck, D. (2008) *L'un-pour-l'autre : Levinas et la signification*, Presses universitaires de France (米虫正巳・服部敬弘訳(2015)『他者のための一者—レヴィナスと意義』、法政大学出版局)。
- (8) Heidegger, M. (2006) *Sein und Zeit*, De Gruyter (細谷貞雄訳(1994)『存在と時間(上・下)』、筑摩書房)。
- (9) Husserl, E. (2000) *Vorlesungen Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins*, Max Niemeyer Verlag (谷徹訳(2016)『内的時間意識の現象学』、筑摩書房)。
- (10) Marion, J. L. (1993) « Note sur l'indifférence ontologique », Greisch, J., Rolland, J. Emmanuel Lévinas: *L'éthique comme philosophie première*, Paris: Cerf (高橋聡一郎訳(1997)『存在論的無差異についての覚書』、『思想』、874号), 52.
- (11) 平石晃樹(2022)「可傷性/可傷性 (vulnérabilité)」、『レヴィナス読本』、59-60頁。以下、本文献引用時は (平石 (ページ数)) の形で示す。
- (12) Levinas, E. (1990) *Totalité et Infini: Essai Sur l'extériorité*, Le Livre de Poche (藤岡俊博訳(2020)『全体性と無限』、講談社), 112。以下本文献を引用する際は (TI (ページ数)) の形で示す。なお『全体性と無限』と『存在するとは別の仕方』の間にはレヴィナスの思想的「転回」があると指摘

されることが多いが、本稿では、感受性の議論においては『全体性と無限』の享受論と『存在するとは別の仕方』における「可傷性」論は両立可能と考え（平石 59 の解釈に則る）、特に断りなく両者を接合させている。

- (13) 藤岡俊博(2022)「身代わり」、『レヴィナス読本』、58 頁。
- (14) ただし「神」と言っても、宗教における神とは全く異なる。宗教における神は観念となつた「無限」だが、ここでいう「神」は「語られたこと」としての観念を超出する、「語る」としての「無限」そのものである。どんな神学にも先立って、栄光は証される (AE 233)。
- (15) 「状態」の対義語としては「行為」が想定されることが多いが、エティエンヌ・フェロンが指摘している通り、レヴィナスの哲学は呼吸の哲学であつて、行為の哲学ではない (Feron, É. (1987) « Respiration et action chez Levinas », *Etudes phénoménologiques*, 3(5/6), 210)。行為という言葉からは能動的な印象を受けるが、呼吸にはそうした運動は認められないからである。そうした背景から、ここでは「行為」(act)ではなく「動作」(move)という表現を用いる。
- (16) 福若真人(2014)「レヴィナス思想における倫理的主体性の変容プロセス:「ペルソナ」と「顔」の比較, 生者と死者の関係を手がかりにして」、『現代生命哲学研究』、3号、77頁。
- (17) 藤岡俊博(2008)「詩人の占める場所: ジャベスとレヴィナス」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』、17号、235頁。以下、本文献引用時は(藤岡 (ページ数))の形で示す。
- (18) もちろん『存在するとは別の仕方』の議論だけでこの「呼吸」について論じつくせるわけではない。レヴィナス自身が注釈で指摘している通り、旧約聖書『申命記』34・5における「神の接吻に際して無際限に息を吐き出すこと」(AE 278)の解釈は、今後の研究において必要になる。レヴィナス以外の文脈でも、例えばメルロ＝ポンティの「肉」との関係は考察すべきであろう。
- (19) Levinas, E. (1990) *De l'existence à l'existant*, Librairie Philosophique Vrin (西谷修訳(2005)『実存から実存者へ』、筑摩書房), 93. 以下引用時は (EE (ページ数))で示す。
- (20) Ricoeur, P. (1997) *Autrement: Lecture d'Autrement qu'être ou au-delà de l'essence d'Emmanuel Levinas*, PUF (関根小織訳 (2014)『別様に—エマニュエル・レヴィナスの『存在するとは別様に、または存在の彼方へ』を読む』、現代思潮新社), 38. 以下引用時は (Ricoeur (ページ数))で示す。
- (21) Sebbah, F. D. (2001) *L'épreuve de la limite: Derrida, Henry, Levinas et la phénoménologie*, PUF (合田正人訳 (2010)『限界の試練: デリダ, アンリ, レヴィナスと現象学』、法政大学出版局), 261. 以下引用時は (Sebbah (ページ数))で示す。
- (22) Levinas, Emmanuel (2000) «De la déficience sans souci au sens nouveau» in *De Dieu qui vient à l'idée*. Librairie Philosophique J. Vrin; 2e édition, pp.77-89(内田樹訳 (1997)「新しい意味での気遣いのない欠陥について」『観念に到来する神について』 国文社、94-110頁。), pp.81-82.